〈実践研究報告〉

大学で実施する認知症カフェにおける学生たちの学び

― 平大認知症カフェ（みゆきよりみちかふぇ）における取り組み ―

福山平成大学
中　嶋　裕　子

はじめに

わが国における「認知症カフェ」は2015年の「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」策定後、爆発的に数を増やした。2015年末時点で全国に約2253ヵ所あり、現在も増加している[1)]。わが国の認知症カフェはオランダのAlzheimer Cafeやイングランドの Dementia Cafeを参考にしたものであるが、わが国ではそれらのように統一された、認知症カフェの定義や運営マニュアル及びガイドラインがなく、認知症カフェ企画運営者それぞれの解釈で展開されている。そのため運営主体、開催場所、プログラム内容に至るまできわめて多様化している現状がある。

認知症介護研究・研修仙台センターの全国調査（2017）によると認知症カフェは20種以上の多様な団体によって運営されている。なかでも最も多い運営主体は地域包括支援センターで全体の33.9%、次いで高齢者支援を目的にしたボランティア団体[2)]で22.7%であった。また、単一法人での運営が80.6%を占めており複数団体で認知症カフェを運営しているのは、全体の2.9%でしかなかった。

開催場所も多様で、カテゴリー分けでみると53.4%が介護・医療関係の施設で実施されており、地域のレストランやカフェで実施しているのは6%のみであった。大学を開催場にしているのは全国に3件で全体の0.2%であった[3)]。

カフェのタイプは多様ながらも3つに分類され、①専門職などによる情報提供や講義があるなど、学習を主たる目的としたもの、②自由な時間枠の中で専門職による相談も行われる居場所を主たる目的としたもの、③当事者同士や家族介護者同士の話や相談が行われる、家族と本人のピアサポートを主たる目的としたものがある。

Ⅰ．平大認知症カフェとは

平大認知症カフェ（愛称：みゆきよりみちかふぇ）は2016年10月に大学の福祉学科事業として立ち上げられた。大学で開催された認知症カフェとしては東北福祉大学に次いで全国で2番目の開催である。

運営主体は、「平大認知症カフェ連絡協議会」である。これは、福山平成大学の大学教員や大学が所在する町内の地域包括支援センター、認知症初期集中支援チーム、介護事業所、御幸町自治会や複数の住民組織から成る複合団体である。

開催場所として、福山平成大学の食堂の2階であるカフェスペースと大学の講義室を利用している。

タイプとしては認知症に関連する情報提供や学びを主たる目的としたカフェである。

2016年10月に第一回目が開催されて以降、隔月開催され、2017年8月で6回の開催となった。

開催時間は13時から15時30分の2時間30分である。内、13時30分から14時40分までを認知症サポータ養成講座とし、それ以外をカフェの時間としている。カフェではカプチーノや抹茶ラテ、紅茶やジュースなど10種類の飲み物を提供している。

多くの方に参加していただくため、参加費は無料とし、運営資金には大学及び福山市の補助金を充てている。

また、気軽に参加してもらうため事前申し込みは不要としている。

Ⅱ．平大認知症カフェの特徴

本カフェの特徴は以下のとおりである。

1．「認知症サポーター養成講座」を中心に据えた学びのカフェ

認知症カフェは先述したとおり、目的は様々であるが、本カフェでは、住民に認知症に関する情報提供をし、認知症について正しい知識を習得してもらうことを目的としている。そこで、「学びのカフェ」と称し、認知症サポーター養成講座を中心に置き、前後にカフェタイムを設定したスケジュールにしている（表１）。

表１　平大認知症カフェ　タイムスケジュール

13：00	カフェ　開場
13：30	認知症サポーター養成講座（前半）
14：00	体操（＊）
14：10	認知症サポーター養成講座（後半）
14：40	オレンジリング　授与
15：10	カフェタイム（感想交流、質疑応答）
15：30	カフェ　閉場

認知症サポーター養成講座のキャラバンメイトは、広島県認知症疾患医療センター、福山市認知症初期集中支援チームの精神保健福祉士と看護師ら４名が交代で担当している。内容は、連絡協議会副代表（精神保健福祉士）と先述の４名がチームを組んで毎回内容を検討し、連続して参加する人々に新しい情報を提供できるように工夫している。また、途中に連絡協議会メンバーの中の介護事業所が持ち回りで実施する体操の時間がある（写真１）。「家でもしてみたい、リラックスできる」と評判が良い。

写真１）認知症サポーター養成校座の合間の体操の時間

2．複合体での運営

平大認知症カフェは大学単体の運営ではない。大学の地域貢献を視野に、大学が所在する町内の自治会等住民団体や認知症グループホームや小規模多機能ホーム等の介護事業所、地域包括支援センターや認知症初期集中支援チームらに呼びかけ、複合体で共同運営している。

多団体が関係していることで、広報の幅も広がり、機関・施設利用者や職員の参加も見られている。運営組織に住民団体が加盟していることで、住民が誘い合って来場する様子もある。参加者総数の内訳は図のとおりである。住民の参加は最も少ない回で 26 人、多い回で 48 人、学生は最も少ない回で 10 人、多い回では 29 人の参加があった（図１）。

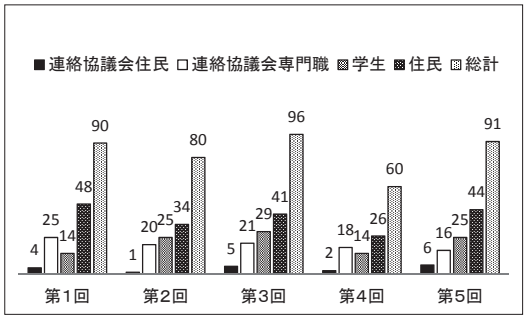

図１）平大認知症カフェ参加者総数の推移

3．相談しやすい環境設定

カフェ運営時にスタッフはそれぞれの名札をつけて参加者を出迎える（参加者は名札を付けない）。専門職は参加者の相談に応じられるように、テーブルの上に「看護師」「介護福祉士」「介護支援専門員」などの立て札のあるところに着席し、参加者が目的に応じて座席を決められるようにしている。また、壁際には個別相談コーナーを設け、認知症地域支援推進員等を配置している。

4．多くの年代層を呼び込む試み

本カフェでは、認知症当事者、介護家族、認知症に関心のある人々だけでなく、児童も集えるカフェを目指している。次世代を担う子供たちにこそ認知症の正しい知識を身につけ、認知症の人が暮らしやすい地域を実現する一翼を担ってほしいと願うためである。

手始めに実施したのが町内小学校での本カフェの愛称（ニックネーム）募集活動であった。

後に連絡協議会の代表に就任した自治会長から学区内の御幸小学校に打診し、全校児童に愛称を考えて提出してもらった。愛称募集活動は、「自分たち（児童ら）が認知症カフェの名づけに関わった」という経験から認知症カフェに関心を持ってもらうことにあったが、更にこの話を聞いた親や祖父母などにも本カフェの存在を発信できるのではないかという期待もあった。結果、400を越える応募名が集まった。中にはその愛称に込めた思いを書いてある応募用紙もあり、誠実に向き合ってくれた様子がよくわかった。力作の中から一つを選ばざるを得ず、苦慮したが「気軽に誰でもふらりと寄ってください」、というメッセージが伝わりやすいということで、「みゆきよりみちかふぇ」に決定した。

このカフェ名を考案してくれた児童には後日、平大認知症カフェ連絡協議会代表、副代表、事務局長が小学校に出向き、全児童の前で表彰状を渡した。また、名称決定後のみゆきよりみちカフェにも招き、副賞を手渡した。

多年代層への働きかけが功を奏し、時折、母親に連れられて一緒に認知症サポーター養成講座を受講する子どもの姿が見られている（写真２）。

写真 2）平大認知症カフェの会場（幼児の参加もあった）

5．メディアの活用

平大認知症カフェは全国で２番目に大学で開催された認知症カフェである。そして、認知症カフェと「認知症サポーター養成講座」を合体して行うのは珍しい試みである。話題性が高いこともあり、複数の新聞が取り上げて記事になった[4)]。

初回から新聞を見て来たという参加者が多く、記事が掲載される度にカフェの参加者が増えた。メディアの活用もカフェの存在を知ってもらうのに効果があったと考えられた。

また、本学のホームページの学科ブログでも認知症カフェの様子を掲載し、高校生を対象にカフェ通信も発行している。

町内の住民には住民団体を通じた呼びかけに加えて、本カフェのちらしを回覧板で回してもらっている。

6．大学生がスタッフ

本カフェのスタッフは、地域の介護事業所等の専門職や住民団体の役員、大学の教員及び本学の学生から成る。地域の参加者たちから「若い子に会うと（話をすると）元気をもらえる」といった声がよく聞かれ、学生たちの参加はカフェに活気をもたらしている。

学生達は、季節感を感じられるようなコースターを折り紙で用意したり、バルーンで花を作って（バルーンアート）壁を飾ったりと心地よいカフェの環境づくりに努めている。また、案内係が持つ案内板なども作成している。その準備は「ボランティア活動論」の時間や空き時間を活用している。

Ⅲ．本研究の目的

1．研究の背景及び目的

専門職や家族、当事者にとっての認知症カフェの存在意義については多数言及されているが学生の学びの視点からそれらを言及したものはそれほど多くない。

そこで、全国で３例しかないとされる大学を開催場とした認知症カフェの一例である平大

認知症カフェに焦点をあて、学生が大学における認知症カフェの運営に参加することでどのような学びを得ているのかについて明らかにしたい。

2．研究方法

2017年7月27日に質問紙調査を実施した。調査の方法は集合調査であった。

3．倫理的配慮

質問紙回答対象者には本研究の目的とデータの扱いについて紙面及び口頭にて説明した。本人が特定されることはないこと、また、成績評価などとは無関係であり、回答はいつでもやめられることを伝えた。

Ⅳ．平大認知症カフェにおける学生の学びについての結果

1．対象者の背景

対象は福山平成大学福祉学科に属するソーシャルワーカー（社会福祉士･精神保健福祉士）、介護福祉士など福祉の専門職を目指し、知識や技術の習得過程にある1年生で、平大認知症カフェ参加経験者26名であった。有効回答は22で回収率は84.6%であった。

1）カフェに参加する前の認知症に関する知識について

カフェに参加する前の認知症に関する知識について尋ねた（複数選択可）。

「認知症に関するテレビ番組を見たことがある」12人（54.5%）、「認知症という名前は聞いたことがある程度の知識であった」6人（27.3%）、「身近に認知症の当事者がいるのでいろいろ聞いていた」6人（27.3%）、「高校のときに福祉の授業があり、そこで認知症について学んだ」3人（13.6%）、「認知症サポーター養成講座を受講したことがあった」3人（13.6%）、「図書館や本屋で本を読んでいた」2人（9.1%）、「介護職員初任者研修を終了しており、その講義で認知症について学んだ」1人（4.5%）と回答が続き、「名前も症状も聞いたことがない」という学生は0人（0.0%）であった（図2）。

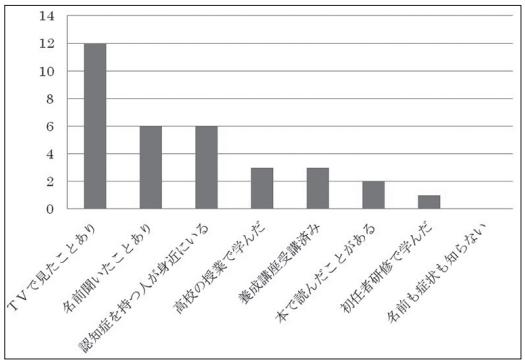

図2）カフェに参加する前の認知症に関する知識について

2）参加動機について

カフェの参加動機を尋ねた（複数選択可）。

一番多い理由が、「認知症についての病状や接し方などを知りたかったから」12人（54.5%）であった。次に、「ボランティア活動は何でもやりたいから」8人（36.3%）、「単位になる（講義の一部に位置づけられていた）から」6人（27.3%）、「友達に誘われたから」6人（27.3%）、「オレンジリングがもらえる（認知症サポーターになれる）から」5人（22.7%）、「専門職につくため（ソーシャルワーカー、ケアワーカーにとって認知症の理解は重要であると思うから）」5人（22.7%）、「認知症の当事者や介護者と話をしてみたかったから」4人（18.2%）、「地域の住民や専門職と接点を持ちたかったから」1人（18.1%）、と続いた。「身近（家族や親戚、近所）に認知症を持つ人がいるから」、という回答は0人（0.0%）であった（図3）。

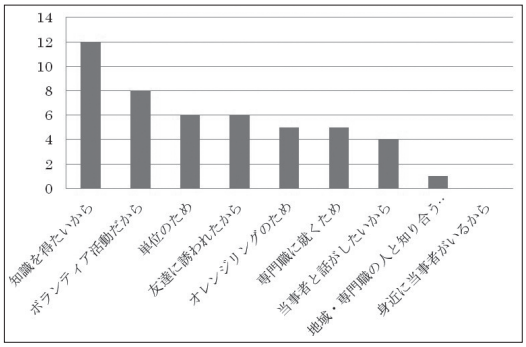

図3）平大認知症カフェへの参加動機について

3）カフェに参加する上で意識している事柄

カフェに参加する上で意識している事柄について尋ねた（複数選択可）。

「笑顔など話しやすい雰囲気を作ること」17人(77.3%)、「自分に課された役割を果たすこと」12人（54.5%）、「参加者の要望や行動を観察すること」7人（31.8%）、「なるべく多くの人と話をすること」6人（27.3%）、「初対面の人との信頼関係の築き方を学ぶこと」6人（27.3%）、「特に意識していることはない」1人（4.5%）との回答を得た（図4）。

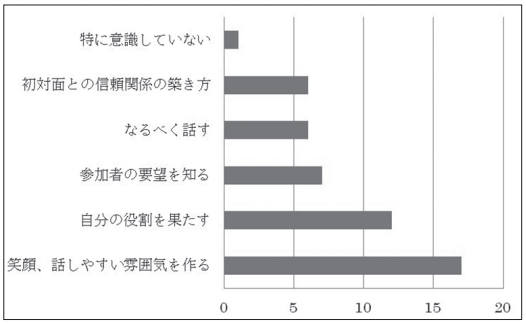

図4）カフェに参加する上で意識している事柄

4）カフェタイムでの地域住民や専門職の人々との交流の度合い

カフェタイムでの地域住民、専門職の方々との交流の度合いについて尋ねた。

カフェでは、近隣の方々を誘い合って、参加される方が多く、その話の輪の中に入ることは簡単な事ではないが、「とてもよくできた」と感じているものは1人（4.5%）で、「まあまあできた」11人(50.0%)も半数以上いた。一方で、「どちらともいえない」4人（18.2%）、「ほとんど出来なかった」5人（22.7%）、「出来なかった」1人（4.5%）という回答であった（図5）。

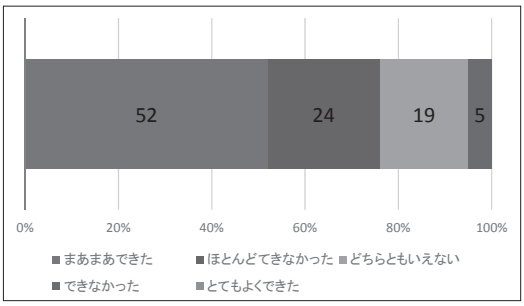

図5）カフェタイムでの地域住民との、専門職の方々との交流の度合い

2．カフェに参加することでの学び

1）カフェにおける役割からの学び

カフェ運営における学生の役割としては、①車で来られた方を駐車スペースに誘導する駐車場係、②大学構内でカフェを探されている方を案内する案内係、③カフェスペースでお茶やお菓子を提供し、心地よいカフェ空間をつくるカフェスタッフ、④講義室にて資料配布、アンケート回収などを担当する講義室担当がある。

それぞれの役割を担うことでどのような学びがあったかについて尋ねた（複数選択可）。

全体の結果としては、「参加者への気配りの仕方」13人（59.1%）、「スタッフ間の協力、連携の重要性」12人（54.5%）、「参加者への礼儀・作法の重要性」10人（45.5%）、「異年齢者層（高齢者）の方々との会話」7人（31.8%）、「参加者への説明力、アピールする力の必要性」4人（18.2%）、「大学生としての自覚（言動に責任を持つ）」4人（18.2%）、「社会貢献しているという自負」4人（18.2%）、「参加者のニーズや要望を知る」2人(9.1%)、という結果になった（図6）。

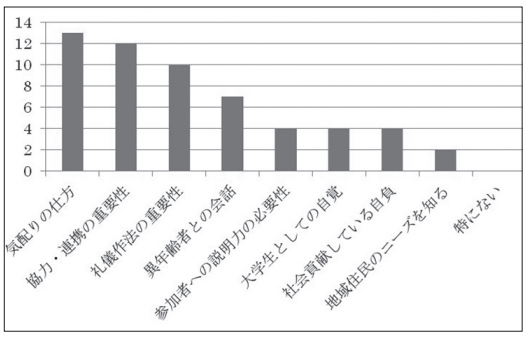

図6）カフェにおける役割からの学び

2）カフェにおける各役割担当ごとの学び

次に、これまで担当した各役割の中で自身の学びにつながったと考えられた役割とその役

割からの学びの内容について尋ねた（複数選択可）。

①駐車場係りの担当学生４人は、「参加者への礼儀・作法の重要性」２人（50%）、「大学生としての自覚（言動に責任を持つ）」２人（50%）、「スタッフ間の協力、連携の重要性」２人（50%）、「社会貢献しているという自負」２人（50%）、「参加者への気配りの仕方」１人（25%）という結果になった。

②カフェスタッフの６人は、「参加者への気配りの仕方」６人（100.0%）、「異年齢者層（高齢者）との会話」２人（33.3%）、「参加者への礼儀・作法の重要性」２人（33.3%）、「参加者のニーズや要望を知る」１人（16.7%）、「社会貢献しているという自負」１人（16.7%）となった。

③案内係の９人は、「参加者への気配りの仕方」８人（88.9%）、「スタッフ間の協力、連携の重要性」８人（88.9%）、「異年齢者層（高齢者）の方々との会話」５人（55.6%）、「参加者への礼儀・作法の重要性」５人（55.6%）、「参加者への説明力、アピールする力の必要性」４人（44.4%）、「大学生としての自覚（言動に責任を持つ）」２人（22.2%）、「社会貢献しているという自負」１人（11.1%）、「参加者のニーズや要望を知る」１人（11.1%）という結果になった。

一方、④講義室に配置され、その役割から何かを学んだとした学生は０人（0.0%）であった。

３）カフェタイムで地域住民や専門職と話す中でどのような発見や学びがあったか。

カフェタイムで地域住民や専門職と話す中でどのような発見や学びがあったかについて尋ねた（複数選択可）。

一番多かった回答は「特になかった」８人（36.3%）という回答であったが、次に、「会話の中から地域ニーズについて考えることができた」７人（31.8%）、「独居高齢者の困りごとなど、地域の課題について聞くことができた」５人（22.7%）、「相槌や傾聴技法など講義で学んだことを生かすことができた」５人（22.7%）、「認知症の当事者や介護している家族の気持ちや実態を聞くことができた」３人（13.6%）、「大学で何を学んでいるかなどの質問を受けることで自分のことを説明する機会があった」２人（9.1%）と続いた（図７）。

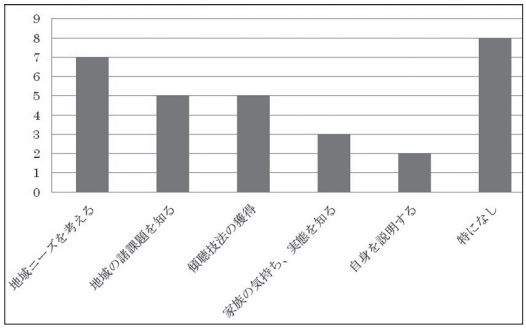

図７）地域住民や専門職と話す中でどのような発見や学びがあったか

４）認知症サポーター養成講座受講後の関心や知識の深まりについて

学生らには平大認知症カフェの特色である認知症サポーター養成講座の受講を毎回薦めている。

受講後、どのような部分で、認知症への関心や知識が深められたかを尋ねた（複数選択可）。認知症サポーター養成講座受講後、学生らの知識が最も深まったのは「住民が認知症について理解していることの重要性」13人（59.0%）で、続いて「認知症サポーターの存在意義」12人（54.5%）、「認知症の症状についての知識や関心」10人（45.5%）、「認知症の当事者へのかかわり方についての知識や関心」10人（45.5%）、「認知症になった時に活用できる社会資源の知識についての知識や関心」９人（40.9%）、「オレンジリングの意味についての理解」９人（40.9%）と続いた。「深まらない」、と回答した者は０人（0.0%）であった（図８）。

５）学生にとっての平大認知症カフェの存在意義は何か

学生にとっての平大認知症カフェの存在意義について尋ねた（複数選択可）。

一番多かった回答は、「地域の人との交流の

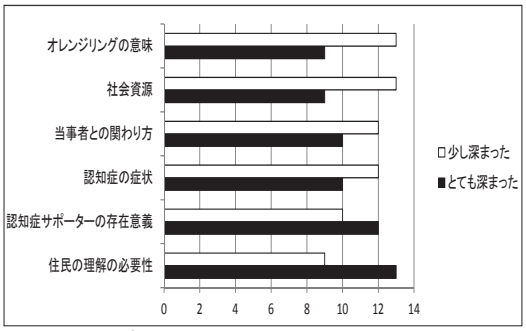

図 8）認知症サポーター養成講座受講後の関心や知識の深まりについて

場」15 人（68.2%）、であり、次に「専門職の実践を間近で見る学びの場」11 人（50.0%）、「誰かの役に立っていると思える場」9 人（40.9%）、「教員や他学生と協働できる場」9 人（40.9%）、「講義での学びを復習したり、実践したりする場」7 人（31.8%）、「単位を取得するための手段」2 人（9.1%）であり、「特に存在意義は感じていない」は 0 人（0.0%）であった（図 9）。

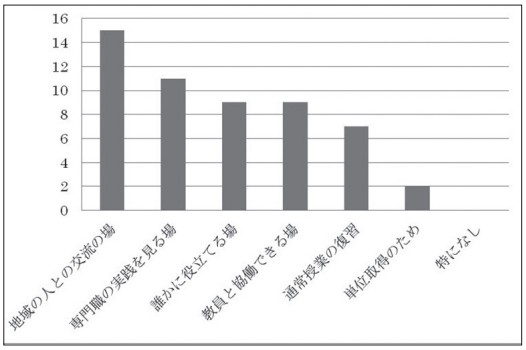

図 9）学生にとっての平大認知症カフェの存在意義は何か

6）認知症カフェの社会的存在意義は何か

学生からみた平大認知症カフェの「社会的存在意義」について尋ねた（複数選択可）。

一番多い回答には、「地域の人々の社交の場」17 人（77.3%）で次に、「ニーズを抱えている人（認知症当事者や介護家族）と社会資源（制度・サービス）を結ぶ場」12 人（54.5%）、「認知症に関する治療や対応を学ぶ場」10 人（45.5%）、「学生が実践的学びをする場」9 人（40.9%）、「研究者ら（先生たち）による社会貢献の実践の場」3 人（13.6%）と続き、「特に存在意義を感じていない」は 0 人（0.0%）であった（図 10）。

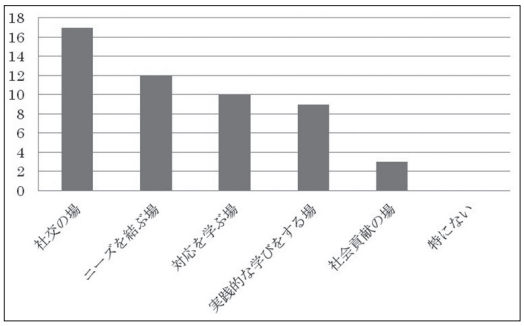

図 10）認知症カフェの社会的存在意義は何だと思うか

7）今後、平大認知症カフェに参加した経験をどのように活かしたいと考えるか

今後、平大認知症カフェに参加した経験をどのように活かしたいと考えるかについて、尋ねた（複数選択可）。

「実習や卒業してからの仕事に活かしたい」18 人（81.8%）、「サポーター養成講座で学んだことを活用して認知症の人を支援する地域活動に参加したい」12 人（54.5%）、「他の認知症カフェにも参加して知識や経験を増やしたい」5 人（22.7%）、「支援者になった時に社会ニーズを踏まえたカフェを立ち上げたい」4 人（18.2%）、「特に活かしたいことはない」0 人（0.0%）であった（図 11）。

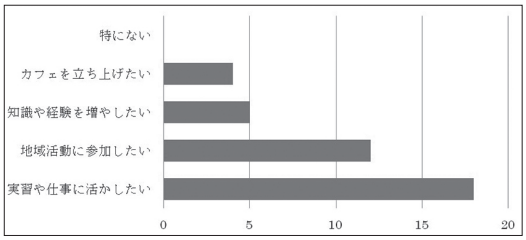

図 11）今後、平大認知症カフェに参加した経験をどのように活かしたいと考えるか

8）カフェへの思いや、全体的な運営について率直な感想を自由記述

カフェへの思いや、全体的な運営について率直な感想を自由記述させ、分類したところ、「認

表２）カフェへの思いや、全体的な運営について率直な感想

分　類	学生による自由記述
認知症についての理解の深まり	今まで関心のなかった認知症について専門的なことを学べた
	認知症への知識、理解が高まりとても良い活動だと思います
	平大認知症カフェに参加するまでは認知症の方を怖いと思っていたが参加後そのように考えることはなくなった
カフェ運営の意義を知る	（認知症を怖いと思っている人もいるので）もっと活動していくべきだと思う
	地域の人々と気軽に交流が出来て私たち学生の学びも深まるしニーズを抱えている人々もみんなと交流できるのはとてもよいことだと思いました
	このような活動をしている所は数少ないと思うから続けていけばいいと思う
	認知症サポーター講座の間にある体操の時間がとても良い時間だったと思う
	全体的に和やかな雰囲気で過ごしやすかった
学習意欲の向上	もう少し認知症当事者と交流を増やしてほしいし話を聞きたい
	機会があれば参加したい

知症についての理解の深まり」、「カフェ運営の意義を知る」、「学習意欲の向上」の３つのカテゴリーに分類できた（表２）。

「認知症についての理解の深まり」のカテゴリーでは、「認知症の方を怖いと思っていたが参加後そのように考えることはなくなった」という率直な感想が述べられていた。

「カフェ運営の意義を知る」のカテゴリーでは、「地域の人々と気軽に交流が出来て私たち学生の学びも深まるしニーズを抱えている人々もみんなと交流できるのはとてもよいことだと思いました」と学生自身と地域の方々及び、当事者の３者にとっての意義への言及があった。「学習意欲の向上」のカテゴリーでは、「もう少し認知症当事者と交流を増やしてほしいし話を聞きたい」という更なる学習の意欲につながる発言が見られた。

Ⅴ．考察

現在、認知症カフェの主体は多種多様であり、全国的にその数を増やし続けているが、大学が主催で実施するケースはまだ少ない。大学における認知症カフェの運営であるからこそ得られたと考えられる学びや意義は以下の事項であった。

１．役割を果たすこと

運営に際して学生らは、駐車場担当、カフェ担当、案内担当、と役割を与えられていた。カフェに参加する上で意識していることの上位に「自分の役割を果たす」ことがあった。教員も近くにいるが、基本的には各々にそれぞれの役割が任されており、主催者であると言う認識の上で責務を果たすことの重要性を感じ取っていたといえる。参加者も大学が主催ということを認識されており、講義スタイルやサービス提供のあり方について、学生に直接要望を伝える場面も見受けられた。

２．安心できる環境における学生と専門職・地域の人々との関わり

学生にとっての平大認知症カフェの存在意義の第一に、「地域の人との交流の場」が挙がった。本カフェの会場が、学生らが日常的に使用しているスペースであることと、何らかの失敗があっても傍に教員の存在があるという体勢があることが彼らに安心感を与え、安心の中で地域の人々と関われる機会になっていることがうかがえた。

また、学生らは参加者らから「（会うと）元気が出る」「がんばっているね」「よろしく頼む」といった存在意義を感じられる言葉を直接かけられる事で、自らの存在を肯定的に捉え、役

立つことの喜びを感じられていたのだと思われた。

同時に、地域の方々にとっても、本カフェが異世代の若い学生たちに安心して出会える場として機能していることも推察できた。

平大認知症カフェの存在意義の第二に、「専門職の実践を間近で見る学びの場」という項目が挙がった。通常の大学の講義の中で「地域福祉」や「アウトリーチ」の重要性は繰り返し説明されている。具体的な地域福祉の充実や専門職のアウトリーチの実践の場に関われることが彼らの学びを大いに刺激していることがわかった。

3．運営についての学び

平大認知症カフェには、広島県内外からの見学者や福山市内外の町内会の役員、施設のスタッフなど、これから認知症カフェを立ち上げる予定の方々がそのノウハウや雰囲気を学ぶために参加されることも多い。実際に学生らもカフェ運営に携わることで、運営に何が必要でどう人を組織化し、広報し、継続可能性を担保するか、といったことを積極的に思考し取り組んでいた。

回答者の中には「支援者になった時に、社会ニーズを踏まえたカフェを立ち上げたい」とした者も複数おり、彼らの実践に対する意欲の醸成に平大認知症カフェが貢献していることが見えた。

4．学びの深化と意欲の向上

家族の気持ちや彼らが認知症サポーター養成校座を受講して、最も理解が深まったとしたのは、認知症の症状そのものの理解ではなく、「住民が認知症について理解していることの重要性」であった。認知症カフェの運営を通じて、「住み慣れた地域で暮らす」ための根幹でもある「地域住民の理解」の必要性について、より理解が深まっていた。

また、「もう少し認知症当事者と交流を増やしてほしいし話を聞きたい」と他団体が実施している認知症カフェへの参加につながった者もあった。

以上のように、平大認知症カフェが学生らの認知症の理解の深まりや学習意欲の向上に貢献していることが伺えた。

5．地域福祉推進のための拠点となる可能性

認知症カフェにおいて自然な形で地域の方との接点を創出することで地域の方と顔見知りになり、地域の祭りや催し物での手伝いを依頼されるなど、その後の学生の地域活動やボランティア活動につなげることもできている。その意味では、認知症カフェは地域福祉推進のための拠点となる可能性も秘めていると考えられた。

6．今後の課題

一方で、今後の課題も明らかになった。学生にはカフェ運営に当たって駐車場係やカフェ係、講義室担当などの役割を担わせているが、学びにつながる役割とそうでない役割があることが本調査で明らかになった。今後は固定の役割を担当させるのではなく、いろいろな役割を担うチャンスを学生に与えることを試みたい。

また、カフェタイムで地域住民や専門職との交流が十分出来たかとの問いに、「できた」と回答したものは半数のみであったことから、引き続き、教員が学生に目配りし、話の輪に入っていけるようにサポートする必要性が感じられた。

今回の調査対象は１年生のみであったが、認知症カフェには２－４年生も参加している。今後、学生の学びの深さや気付きに参加回数や学年によってどのような変化がみられるのか、比較調査・追跡調査を行いたいと考えている。

おわりに

大学で認知症カフェを開催することの意義は、学生らが安心した環境の中で試行錯誤しながら自主性を発揮できることである。困ったとき、迷ったときには教員が傍らにいることでの安心感がある。学生らは自分たちが主催者であることを意識しながらスタッフ間の連携・協力のあり方や効果

的な情報提供の仕方について学んでいた。

この平大認知症カフェでの学びを実践につなげていくであろう今後の学生らの活躍に期待したい。

＜註＞

1)2012年の「認知症施策推進5ヵ年戦略（オレンジプラン）」においてモデル事業で実施されたことを契機に認知症カフェの存在が理解され始めた。2015年の「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」にて（認知症カフェ等の開設が）認知症地域支援推進員の役割として明記されたことを機に爆発的に拡大した。

2）高齢者の支援を目的にした団体やキャラバンメイト、認知症サポーターの団体を指す。

3）認知症介護研究・研修仙台センター（2017）p.8, p.9, p.51.

4）これまでの掲載記事には、「広島・福山平成大が『認知症カフェ』」（2016.9.28 山陽新聞デジタル）、「認知症カフェ大学内にも」（2016.10.14　中国新聞）、「集う　平大認知症カフェ」（2016.10.14 朝日新聞）、「みゆきよりみちかふぇ　福山平成大認知症カフェ愛称考案の川上君に感謝状」（2017.2.19　山陽新聞）、「愛称『みゆきよりみちかふぇ』命名の児童に感謝状」（2017.3.5 朝日新聞）、「コーヒー片手　気軽に交流」（2017.4.27 読売新聞）がある。

＜参考文献＞

1）長谷川真美・佐藤光栄・柿沼直美ほか（2016）「看護大学で行う認知症カフェの成果と課題－学生参加と大学の社会貢献の視点から－」『東都医療大学紀要』6（1）.49-56.

2）家根明子（2014）「認知症カフェにおける初期認知症者支援の実践」『人間文化研究科年報』30.133-143.

3）家根明子･小野塚元子･廣川聖子ほか（2015）「認知症者支援：専門職にとっての認知症カフェの持つ意義と課題」『奈良学園大学紀要』2.113-118.

4）増井玲子・佐藤友美・吉田留美（2015）「認知症の人を介護する家族支援としての認知症カフェの意義」『認知症ケア事例ジャーナル』8（3）. 209-216.

5）中司登志美（2017）「大学が認知症カフェに取り組む意義 「ガーデンカフェ」と「平大認知症カフェ」に取り組んで」『認知症ケア事例ジャーナル』10（1）3-8.

6）認知症介護研究・研修仙台センター（2017）『認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書』

7）太原牧絵・坂井晶子（2017）「地域住民と大学で認知症を学ぶ試み ～安佐北区オレンジ大学の実践からみえてきたこと～」人間福祉研究 15. 38-45.

8）上野山裕士（2016）「認知症カフェにおける世代間交流―地域インターンシップ･プログラムでの実践を事例に―」『観光学』14. 33-47.